

平成30年9月5日現在

機関番号：30110

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2017

課題番号：25862267

研究課題名(和文) 乳幼児期における親の発達と育児をする喜びとの関連

研究課題名(英文) Relationship between parental growth and happiness with childcare in early childhood

研究代表者

明野 聖子 (Akeno, Seiko)

北海道医療大学・看護福祉学部・助教

研究者番号：20433451

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、乳幼児期の母親の親としての発達と育児をする喜びとの関連を明らかにすることである。

乳幼児健診を受診した母親1103名を対象に無記名自記式質問紙により調査を行った。親としての発達には育児期の親性尺度を、育児をする喜びには母親の育児幸福感尺度を用いた。

結果、450名(回収率40.8%)からの回答が得られた。育児幸福感が高い母親は育児幸福感が低い母親と比較して、親性が有意に高いことが示された。以上の結果から、母親が育児を通した喜びを感じるためには、親としての発達を支援していくことが重要であると示唆された。

研究成果の概要(英文)：The study was performed to examine the relationship between growth as a mother and happiness with childcare in early childhood. An anonymous self-recorded questionnaire was given to 1,103 mothers who participated in a health check-up of their infants. The Early Childhood Parenting Scale and the Childcare Happiness Scale were used to measure parental growth and happiness with childcare, respectively. Responses were obtained from 450 mothers (collection rate: 40.8%). These responses showed that the parenthood of mothers with higher childcare happiness was significantly higher than that of those with lower childcare happiness. This finding suggests that support for parental growth is important to allow mothers to be content with childcare.

研究分野：地域看護学

キーワード：親性 母親 育児幸福感 育児支援

1. 研究開始当初の背景

育児不安の軽減や虐待予防は我が国の重要課題となっている。少子化や核家族化の進行により、育児をする母親はますます孤立しやすい状況にあるといえる。育児不安や育児ストレスなどの育児に対するネガティブな側面に対する支援とともに、育児を通じた親としての発達や育児幸福感などの育児に対するポジティブな側面から、支援を検討していくことが重要である。

育児研究においても、子どもの成長・発達のための「子どものための育児」の視点に加え、子育てが他からでは得られない多くの学びや価値をもたらすことに着目した「親のための育児」の視点に重要性が増している。親となることによる成達は、柔軟性、自己制御、視野の広がり、運命と信仰の受容、生きがい、自己の強さをもたらす、成長・発達しているという実感は精神的健康の基盤である。育児期というライフステージにおいて、親自身が子育てをする体験から学び得ることやその認識が育児のポジティブな側面である育児幸福感に影響する可能性が推測できる。

先行研究を概観したところ、育児幸福感と親性との関連は検討されておらず、育児幸福感につながる親としての成達がどのようなものかは明らかにされていない。妊娠・出産・育児期以降も、親としての役割を獲得し成長するといわれている。親性と育児幸福感との関連や時期よる親性の特徴が明らかになれば、時期に合わせた具体的支援の検討も可能になると考える。

2. 研究の目的

本研究は、乳幼児期の母親の育児をする喜びにつながる親としての成達を明らかにすることを目的とする。乳幼児期の親の支援のあり方を検討するために、以下の内容を明らかにする。親としての成達には親性尺度を、育児をする喜びには育児幸福感尺度を活用する。

4 か月、10 か月、1 歳 6 か月、3 歳時における母親の親性と育児幸福感を明らかにする。

育児幸福感の得点が高い母親と低い母親の各時期における親性の違いを抽出する。

各時期における親性の比較から、育児の喜びにつながる親としての成達を明らかにする。

3. 研究の方法

1) 調査対象

北海道内の都市近郊の 4 自治体において実施される乳幼児健診を受診した母親 1103 人を対象とした。

2) 調査方法

4 か月児健診、10 か月児健診、1 歳 6 か月

児健診、3 歳児健診の各健診会場において、無記名自記式質問紙を配布し、返信用封筒にて郵送により回収を行った。

3) 調査項目

(1) 基本属性に関する項目

両親の年齢・職業、子どもの性別・出生順位、家族形態をたずねた。

(2) 親性に関する項目

大橋ら(2010)の「育児期の親性」尺度を用いた。親性尺度は、親になることを親自身がどのように受けとめ、子育てにおいて子どもへの認識を深め親としての満足感を得ているのかという親の特性をとらえる尺度である。「親役割の状態」(13 項目)、「親役割以外の状態」(9 項目)、「子どもへの認識」(11 項目)から構成される計 33 項目について、健診対象児の育児に対する気持ちをたずねた。大橋らにより、「親役割の状態」は、子どもに接しながら、子どもの世話という育児能力を身につけ、育児に関心を持ち親としての役割に満足感を抱いている状態と定義されている。また、「親役割以外の状態」は、妻という役割をもち社会で働く存在であることへの認識であり、自己肯定感や社会との関係性を含むと定義されている。「子どもへの認識」は、子どもとの関係を育みながら、子どもの現在と今後の成長・発達の様子の理解を深め、愛情をいだきながら接している様子であると定義されている。各項目は、「まったくそのとおり」から「まったく違う」の 5 段階評価により、得点が高いほど親性が高いことを示す。

(3) 育児幸福感に関する項目

清水ら(2007)の母親の育児幸福感尺度を用いた。育児幸福感尺度は、育児中の母親の肯定的な情動をとらえる尺度である。「子どもの成長」(6 項目)、「希望と生きがい」(8 項目)、「親としての成長」(7 項目)、「子どもに必要とされること」(5 項目)、「夫への感謝の念」(5 項目)、「新たな人間関係」(4 項目)、「子どもからの感謝や癒し」(3 項目)、「出産や子育ての意義」(3 項目)から構成される計 41 項目について、健診対象児の育児に対する気持ちをたずねた。各項目は、「あてはまらない」から「あてはまる」の 5 段階評価により、得点が高いほど育児幸福感が高いことを示す。

(4) 父親の育児・家事の実施頻度と母親の満足感に関する項目

父親の育児・家事の実施頻度、父親が行う育児に関する母親への情緒的サポートについては、母親からみて「毎日する」「週に数回する」「週に 1 回以下」「全くしない」の 4 段階により回答を得た。父親の育児・家事に対する母親の満足感、父親が行う育児に関する母親への情緒的サポートに対する満足感については、「とても満足」「まあ満足」「あ

まり満足していない」「満足していない」の4段階により回答を得た。

4) 分析方法

各項目は単純集計を行った。健診の時期別にみた親性の比較には、一元配置分散分析を用いた。親性と育児幸福感の関連については、育児幸福感の総得点を中央値で2区分し、親性について4か月児健診、10か月児健診、1歳6か月児健診、3歳児健診の時期別にt検定を用いて比較を行った。統計解析にはSPSS Statics ver.23を用いた。有意水準は5%未満とした。

5) 倫理的配慮

対象者には、調査の依頼状により、研究の趣旨と目的・内容、倫理的配慮について説明し、調査協力への承諾を得た。調査への回答は自由意志であり、回答を拒否しても乳幼児健診の利用にあたり不利益がないことを説明した。回答した調査票の返送をもって同意が得られたとみなした。また、本研究は、北海道医療大学看護福祉学部研究科倫理委員会の承認を得て行った(承認番号:N023023)。

4. 研究成果

1) 対象者の属性

調査票の回収数は450人(回収率40.8%)であった。各健診による調査票の回収数は、4か月児健診(以下、4か月)149人、10か月児健診(以下、10か月)31人、1歳6か月児健診137人(以下、1歳6か月)3歳児健診(以下、3歳)131人であった。

母親の年齢は、すべての健診において30~34歳の母親が最も多く、4か月37.2%、10か月38.7%、1歳6か月38.0%、3歳38.2%であった。父親の年齢は、10か月では35~39歳が38.7%と最も多かった。その他の健診では、30~34歳が最も多く、4か月では41.8%、1歳6か月36.3%、3歳31.2%であった。

母親の職業について、職業なしの母親は4か月77.5%、10か月80.6%、1歳6か月63.5%と6割以上を占めた。3歳では職業なしの母親が56.9%であった。

健診対象児の性別は、4か月では女兒が56.4%、10か月では男児が54.8%であった。その他の健診では、性別は約半数ずつで、1歳6か月では男児51.5%、3歳では男児50.0%であった。

健診対象児の出生順位は、すべての健診において第1子が最も多く、4か月52.6%、10か月45.2%、1歳6か月54.8%、3歳43.8%であった。

家族形態は、すべての健診において核家族が最も多く、4か月93.97%、10か月90.3%、1歳6か月88.2%、3歳89.2%であった。

2) 父親の育児実施状況と母親の満足感

母親からみた父親の育児について、「毎日

する」と回答した母親が最も多かった項目は「遊び相手」(53.6%)と「泣いた子をあやす」(40.2%)であった。「週に数回する」と回答した母親が最も多かった項目は「お風呂に入れる」(41.4%)と「食事をさせる」(39.1%)、「おむつを替える」(36.9%)であった。父親の育児に対する母親の満足感は、「まあ満足」(50.0%)と「とても満足」(28.5%)の母親をあわせると7割以上を占めた。

父親が行う育児に関する母親への情緒的サポートは、すべての項目について「毎日する」と回答した母親が最も多く、「疲れたり悩んだりしているときの励まし」(32.2%)、「子育ての精神的支え」(42.7%)、「心配事や悩み事があるときに親身になって聞いてくれる」(41.9%)、「母親への気遣いや思いやり」(39.1%)であった。

3) 健診の時期別にみた親性と育児幸福感

親性の総得点(平均値±標準偏差)は、4か月児130.5±14.8点、10か月児127.6±15.3点、1歳6か月児127.8±15.1点、3歳児126.7±15.1点であった。これらの数値は、大橋ら(2010)による調査の平均値123.6点よりも高かった。

育児幸福感の総得点(平均値±標準偏差)は、4か月児193.0±10.7点、10か月児192.7±13.4点、1歳6か月児188.6±14.4点、3歳児187.4±15.3点であった。これらの数値は、清水ら(2007)による調査の平均値184.52点よりも高かった。

育児における親の発達に関する先行研究(高橋ら、2009)では、父親の育児参加が母親の発達に関連することが明らかになっている。本研究では、母親からみた父親の育児実施頻度のうち、「遊び相手」を「毎日する」(53.6%)、「泣いた子をあやす」を「毎日する」(40.2%)と回答した母親が4割以上を占めた。また、育児に関する父親が行う母親への情緒的サポートのうち、「子育ての精神的支え」を「毎日する」(42.7%)、「心配事や悩み事があるときに親身になって聞いてくれる」を「毎日する」(41.9%)、「母親への気遣いや思いやり」を「毎日する」(39.1%)と回答した母親は約4割を占めていたことから、これらの父親の育児や育児に関する情緒的サポートに関する母親の認知の高さが親性の総得点の高さに反映したと推測された。

4) 健診の時期別にみた親性

健診の時期別みた親性の比較から、総得点には有意な差はみられなかった。3つの下位尺度のうち有意差がみられたのは「親役割の状態」であり、4か月の母親(56.4±6.2)は、3歳の母親(52.8±7.3)、1歳6か月の母親(53.8±7.0)よりも有意に得点が高かった。

出産後、子ども4か月時の時期は、子どもとの愛着形成や親としての役割を獲得していく時期である。親性尺度のうち、他健診時

期と有意差がみられた「親役割の状態」は、「親役割の満足感」や「育児への関心」「育児態度」「子どもとの関係」をとらえる尺度の内容であり、子どもが4か月頃の母親は、出産後に子どもとの愛着形成が一段と深まり、新たな親としての役割を獲得していく時期にあるという、母親の特性が関係していると推察された。

5) 親性と育児幸福感との関連

育児幸福感の総得点を中央値で2区分し、育児幸福感が高い母親、低い母親とした。育児幸福感が高い母親は、低い母親よりも親性の総得点と3つの下位尺度すべてにおいて得点が高く、有意な差がみられた($p < 0.001$)。さらに、健診の時期別に育児幸福感が高い母親と低い母親の親性の比較を行った。

4か月では、育児幸福感の高い母親は低い母親よりも、親性の総得点($p < 0.001$)すべての下位尺度「親役割の状態」($p < 0.001$)、「親役割以外の状態」($p = 0.004$)、「子どもへの認識」($p = 0.008$)の得点が有意に高かった。

10か月では、育児幸福感の高い母親は低い母親よりも、親性の総得点($p = 0.002$)と下位尺度「親役割の状態」($p = 0.024$)、「子どもへの認識」($p = 0.002$)の得点が有意に高かった。

1歳6か月では、育児幸福感の高い母親は低い母親よりも、親性の総得点($p < 0.001$)すべての下位尺度「親役割の状態」($p < 0.001$)、「親役割以外の状態」($p < 0.001$)、「子どもへの認識」($p < 0.001$)の得点が有意に高かった。

3歳では、育児幸福感の高い母親は低い母親よりも、親性の総得点($p < 0.001$)と下位尺度「親役割の状態」($p < 0.001$)、「子どもへの認識」($p = 0.001$)の得点が有意に高かった。

以上の結果から、育児幸福感の得点が高い母親と低い母親の各時期における親性の違いとして、4か月と1歳6か月では、育児幸福感が高い母親は低い母親よりも、「親役割の状態」「親役割以外の状態」「子どもへの認識」すべての下位尺度の得点が有意に高いことが明らかにされた。また、10か月と3歳では、下位尺度のうち「親役割以外の状態」には、有意差はみられなかった。本研究では、母親の職業の有無について各時期別にみると、3歳では仕事を「している」と回答した母親が43.1%と最も多く、働くことを通して社会との関係をもっている母親が多いことが推察された。また、子どもが3歳を過ぎれば、多くが保育所や幼稚園に入園し、母親自身がより一層社会とのつながりをもちやすくなるという背景から、3歳の母親の「親役割以外の状態」には有意差はみられなかったと推察された。

10か月では、対象者数・回収数が少なかったことから、今後もデータを蓄積し分析する必要があると考える。

本研究のこれまでの結果をふまえると、4か月、10か月、1歳6か月、3歳のすべての

時期において、母親が育児に喜びを感じるためには、子どもの発達や特性を理解したうえで時期に応じた関わりをもつことや子どもの発達に応じた育児技術や育児能力を獲得し、親としての役割を果たしていることへの満足感を感じられるように支援していくことが重要であると示唆された。

〔引用文献〕

- 1) 大橋幸美、浅野みどり(2010): 育児期の親性尺度の開発-信頼性と妥当性の検討-. 日本看護研究学会雑誌、33(5) 45-53.
- 2) 清水嘉子、関水しのぶ、遠藤俊子他(2007): 母親の育児幸福感-尺度の開発と妥当性の検討-. 日本看護科学会誌、27(2) 15-24.
- 3) 高橋道子、高橋真実(2009): 親になることによる発達とそれに関連する要因. 東京学芸大学紀要、60、209-218.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

明野 聖子 (AKENO, Seiko)

北海道医療大学・看護福祉学部・助教

研究者番号: 20433451